

中国と異域を結ぶ想像力

——郭小櫓の *I Am China* における越境の諸相——

郭 濟 飛

はじめに

1980年代以来、中国と世界は繋がり、多くの中国人が出国して、異域で暮らすことになった。それに伴ってイーユン・リー、郭小櫓など、越境した環境の中で作品を書いている作家も続々と現れている。彼女らの作品には、異域への幻想と現実とのギャップや、中国への複雑な思い、越境する中で感じる自らのアイデンティティーの揺らぎなどが見え隠れしている。その心に去来するさまざまなイメージとそれを喚起する精神を、越境する想像力と呼びたい。また、海外でも中国に興味を持ち、中国について考え語る人々が増え、それに接する中国の人々も増えた。越境した人々は、そうした海外からの想像を現場で目の当たりにする。それも彼らの心のあり方に大きな影響を与えている。こうした想像力が新たな時代の中国の人々の心を映す鏡一つであることは確かだ。だが、これまでそうした想像力について語られることは、ほとんどなかった。本論文では、中国から欧米に渡った越境作家の一人、郭小櫓の小説 *I Am China* を取り上げ、作品に見られる越境の三つの様相と、越境にともなう異域想像の特徴とその変化について考察し、越境作家にみられる越境する想像力の一端を明らかにしたい。

郭小櫓 (Xiaolu Guo) は、1973年浙江省の温嶺市に生まれた女性作家・映画監督である。1993年北京電影学院の文学科に入り、2000年修士号を取って卒業した。在学中に小説を書き始め、その成果は『芬芳的37°2』⁽¹⁾として2000年に出版された。卒業後、作家兼脚本家として大陸で3年ほど活躍していた。この時期に、農村出身の若者が北京などの大都市へ行き、明るい未来を求めながら絶えず挫折して人生の幻滅を感じる作品をいくつか書いた。

2003年前後、郭小櫓はイギリス政府の奨学金をもらい、National Film and Television Schoolへ留学し、ドキュメンタリー制作を専攻した。それ以来、イギリス、フランス、ドイツ、スイス、アメリカなど欧米の各地で映画監督と作家として創作を続けてきた。イギリスへ移住した当初、郭小櫓は英語の習得と英語での小説創作に苦しみ、自分の中国語小説を英語に改作したり、英語

(1) この小説は後に英語に改作され、*20 Fragments of a Ravenous Youth* というタイトルでイギリスで出版された。この小説の英語版について拙稿「可能性はどこにあるのか——郭小櫓の *20 Fragments of a Ravenous Youth* から見るアイデンティティーの不安」を参照。

習得のプロセスをテーマに英語小説を書いたりして、英語作家として自立しようと試みている。自らのヨーロッパ生活と英語創作の経験に基づいて、彼女はいくつかの作品で中国と異域⁽²⁾の間に生きる人々の境遇について書き始めた。越境する人物は、異域で生きながら、中国のことを新たな視点から見直し、中国と異域の関係について考えるようになる。越境のあり様や、「中国-異域」の関係は、このような作品の重要なテーマとなっている。特に、2014年出版された長編小説 *I Am China* はその種の作品の代表作といえる。

今のところ、郭小櫓の作品の越境性に関する先行研究は見当たらない。*I Am China* に関しても、いくつかの評論のほか、次の論文一つしか見当たらない。*Translation as a Motor of Critique and Invention in Contemporary Literature: The Case of Xiaolu Guo* において、作者の Fiona Doloughan は、小説の中の中国語の英訳に注目し、今日までの翻訳理論の変遷を辿りながら、小説中の翻訳行為がプロットの展開に重要な役割を演じて、批評と創造の手段として働いていると主張する。Doloughan によると、英語が特定の地域の言語を脱して世界の「共通語」(lingua franca) になりつつある現在の言語コンテストでは、翻訳という行為が個人の社会的・文学的アイデンティティーの構築に大きく貢献しているとし、その現象の一例として、郭小櫓の作品を挙げている。この論説は、翻訳とその理論を議論の中心に据えているが、登場人物たちの越境行為とその越境の描写に潜んでいる作家の想像力の特徴には触れていない。しかし、論者から見ると、郭小櫓の作品を読み解くには彼女の想像力の特徴を理解することが重要である。そのためには、やはりこの小説における越境とそれにとまなう登場人物の心理と人生観の変化に関する分析が必要だと思われる。

中国からイギリスへ移住するとともに、郭小櫓は中国大陸の若者の想像のあり方から、中国と異域の狭間で生きる人々の想像の諸相へとその創作の重点を移した。その著作には、越境によって生じた現代(特に80年代以降)の中国の若者の精神の変化が内包されているだけでなく、越境者との出会いによって生じた欧米方面からの中国への眼差しの変化も含まれている。郭小櫓の作品には、この二つの文脈が合わさる中で、中国-欧米の関係をめぐる想像力が変化していく姿が描かれている。越境を糸口に分析して初めて、このような今日の特徴を解き明かすことができるはずである。

(2) この論文では、登場人物の祖国の以外の地域という意味で「異域」という言葉を用いる。小説 *I Am China* では、Jian と Mu にとって、中国以外の地域は全部異域/外国 (foreign) である。また、この小説では、外国と欧米 (the West) はほぼ同義語として用いられている。ほかの越境作家の小説では、日本も異域に含まれることがある。

1. 越境の三つの様相——彼方の異域へ

1.1. 物語の構成

作品に描かれた想像力の分析に入る前に、まずこの物語の登場人物、ストーリーと語りの構造を簡単に紹介しておく。

この小説の主人公は Iona、Kublai Jian と Deng Mu の三人である。そして、小説全体はこの三人の視点からそれぞれのストーリーを描く三つのナラティブによって構成されている。

Iona は、スコットランド島出身の若い女性で、ロンドン大学の東洋アフリカ研究学院 (SOAS) を卒業したあと、中国語の翻訳者として働いている。出版社の依頼を受けて、2013年4月から11月まで Kublai Jian と Deng Mu の往復書簡と日記を翻訳する仕事に専念する。翻訳をしながら、二人の人生に魅了され、二人の過去、現在と未来を想像し始めて二人に会いたくなる。

Kublai Jian は、北京生まれのパンクミュージシャンで、大学時代に天安門事件を経験し、パンクミュージックを通して「芸術即ち政治」という信念を貫く。2011年11月の演奏会で政治的なマニフェストを流布したことで当局に逮捕され、国外に追放された。ヨーロッパに亡命し、イギリス、スイス、フランス、ギリシャなどの各地を転々とした末、ギリシャのクレタ島で遺言書を残し、海に身を投げて自殺する。

Deng Mu は、Jian の大学時代からの恋人で互いに愛し合っている。大学時代は外国文学を専攻し、詩人になりたかったが、卒業後、政府系の雑誌社で編集者として働くようになった。Jian と違って、芸術は政治と無関係で個人の自由を象徴するものだと思っている。Jian が追放されたあと、仕事をやめて詩人・ミュージシャンとしてアメリカを訪れたが、アメリカに失望し帰国する。最後は、ロンドンにわたって中国系の造船会社で仕事しながら、詩人として活躍する。

物語の中で、Jian は政治亡命者として中国からヨーロッパへ越境している。Mu は詩人になる夢を叶えるためにアメリカとイギリスへ二度越境している。そして、Iona は二人の書簡と日記を読んで「中国」という他者を想像する。これは想像を通しての越境行為といえる。三人はそれぞれ越境の三つの様相を象徴している。それらは、それぞれ越境した中国人の異域への想像のパターンと、異境の人々が中国を想像するときのパターンを示している。そのパターンとはどのようなものだろうか。この三つの越境の実態を順次見てみよう。

1.2. Jian の越境——イデオロギーと政治的亡命

まず、Jian の越境は1980年代以来の中国知識人の政治的願望の典型といえる。

Jian は1972年北京の政治家のひとり息子として生まれた。その祖父母は長征に参加した軍人で、長征の途中で死亡し、英雄とみなされた。父の Hu Shulai は英雄の息子として政治の道を順調に歩み、最後は国家主席となった。母はモンゴル出身の知識人で、文革中フランスの作曲家エリック

ク・サティのピアノ曲アルバムと一本のリップスティックを持っていたことで紅衛兵に「走資派」として迫害され、Jian が4歳の時に自殺した。当時、政府要員だった Hu Shulai は自分の政治的地位を保つために、妻を助けなかった。しかも、子どもだった Jian に暴力を振るい、彼を見捨ててほかの女性と結婚した。Jian は父親を憎み、12歳以降一生にわたって父に会うことを拒絶した。子供時代に遭遇した家庭悲劇は、少年だった Jian の心に中国の政治と Kommunismus に反抗する種をまいたと言える。

北京大学に入った Jian は、パンクミュージシャンとして活躍しながら学生運動にも参加した。天安門事件のとき、政府の殺戮と残忍さを目にした Jian はますます中国の政治イデオロギーに絶望を感じ、芸術を通して政治に介入し、系統的に中国を変えるべきだと信じるようになった。演奏会で流布したマニフェストの次の一節はその信念を最も明白に表している。

Now the artist must deal with politics ... Art is the politics of perpetual revolution. Art is the purest revolution, and so the purest political form there is ... Revolution = art, and art = perfect freedom. Right now, we have no revolution, no real art and freedom.⁽³⁾

アーティストは政治に取り組むべきだ……芸術とは永久革命の政治だ。芸術は最も純粋な革命であるゆえ、最も純粋な政治の形式でもある……革命 = 芸術、そして芸術 = 完璧な自由。現在、私たちには革命もないし、本当の芸術と自由もないのだ。

「革命 = 芸術 = 完璧な自由」、Jian は心からこの観念を信じていた。マニフェスト事件の後、Jian は1ヶ月ほど政治犯収容所に監禁されたが、最後はヨーロッパに追放された。彼にとって、越境は自らの選択ではなく、強制された政治亡命である。政治改革、言論の自由、芸術の自由、これは80年代の中国で成長した多くの若者と知識人が抱えていた夢である。特に天安門事件後の数年間、政治問題で海外へ亡命した作家、芸術家、政治活動家などの知識人も続出した。例えば、天安門事件のとき北京で学生デモをリーダーした王丹は、事件後の裁判で政治犯と判決されて錦州監獄に収容されたが、後に仮釈放されてアメリカに亡命した。小説中の Jian の越境はまさにこのような政治的願望と政治亡命の実態を反映していると言える。

1.3. Mu の越境——自由への憧れ

Mu の越境は政府によって強制されたものではなく、自らの意志による個人選択である。

Mu は1975年浙江省の農家の一人娘として生まれた文芸好きな女性である。「朦朧派」の詩人、シルヴィア・プラス、アレン・ギンズバーグなどの外国詩人に憧れて大学時代から詩人を志し、

(3) Xiaolu Guo: *I Am China*, Vintage 2014, p361.

卒業後は、政府系の詩歌雑誌 *Tomorrow* (『明日』) に入って編集者になった。その雑誌で外国詩人の詩歌を翻訳して紹介できると思っていたが、実際の仕事はただ「コンマをチェックすることに専念する」ような校正の仕事ばかりだった。また、中国の文芸審査の厳しさにも不満だった。例えば、*My Own Private Idaho* というアメリカの小説が中国の政府系の雑誌 *Western Classics* によって翻訳されたとき、そのタイトルは *Idaho in My Heart* に修正された。その理由は「政府系の雑誌では、private という言葉を使うのは適切なこととは考えられなかった。heart はそれよりポジティブな言葉だ。」(Using the word “private” was not thought a good idea in a state magazine, while “heart” is more a positive word.⁽⁴⁾) という。「private」という言葉は読者にアメリカの個人主義の観念を植え付ける恐れがあって政府系の雑誌の編集者に嫌われ、翻訳のとき「heart」(心) という語彙に変更されたというのだ⁽⁵⁾。Mu はこのような雰囲気にも失望を感じていた。詩人になる夢も実現できなかった。

Mu の家庭生活も不幸なものだった。Jian と愛し合っていたが、政治と芸術の関係に関して二人の意見は対立する。Jian は家庭のことを顧みず、危険を冒してパンクバンドと政治運動に取り組んでいた。2006年、二人の間に子供ができたが、6ヶ月後に病気で亡くなった。Mu は落ち込んで生活に向き合う勇気をなくし、Jian との同居(二人は結婚していなかった)をやめて一人暮らしをする。3年後、また Jian と同居するようになったが、彼が昔と変わらず執拗に政治運動に取り組む様子を見て心苦しかった。Jian が海外に追放されたあと、北京で孤独と虚しさを感じ、未来の希望が見えなくなる。そのとき、父が末期の喉頭癌になって上海の病院で治療を受けていた。その病院で父を看護した Mu は病人が続々と死んでいくのを目にしていますます落ち込み、生きることの意味がわからなくなる。

夢も叶えることができず、幸せな家庭生活も手に入れられず、中国に絶望を感じた Mu は外国へ越境することを決めた。その越境は前後二回あった。一回目はアメリカへ、二回目はイギリスへ。Mu は自由に憧れ、閉塞感に満ちた中国から離れれば、詩人になることも新しい生活を始めることもできると考えた。その時の彼女にとって、アメリカに代表される異域は自由を象徴するユートピアであった。Mu の越境は、80、90年代欧米の自由に憧れて出国した多くの中国人の願望を反映していると言ってもいい。

1. 4. Iona の越境——他者への想像

この小説には、中国からヨーロッパとアメリカへの越境のほか、欧米から中国への越境も見られる。それは Iona のシンボリックな越境である。シンボリックというのは、イギリスから中国

(4) Xiaolu Guo: *I Am China*, Vintage 2014, p144.

(5) 「我心中的祖国(我が心の祖国)」のような愛国主義の吹き込みを読者に思い出させる、ということだろう。

へ空間的に移動するのではなく、他者を想像することで越境しているからだ。

Iona の想像した他者は、Jian と Mu によって代表される China である。Iona はスコットランド西海岸のマル島 (Isle of Mull) に生まれたが、島の生活が退屈で、子供の時から家の前の大きな松の木に登って海峡の向こう側のアイオナ島 (Isle of Iona) を眺めながら外の世界に憧れていた。やがて、島から離れてロンドンの大学に入った。卒業後のロンドン生活は、実家にいた時と同じく虚しさに満ちたものだった。彼女に生きている実感を与えたものが二つある。一つは知らない男との一度きりのセックスである。もう一つは中国語翻訳の仕事である。外国語は未知の不思議なものを想像する機会を与えてくれた。その生活は小説の第 1 章第 2 節で次のように述べられている。

For Iona, there are two modes of expression that bring her to life. One is sexual act … Her other world is through words … she found herself longing for foreign words: the alien sound, the unknown syllable, the mysterious sign … a foreign language would offer her an escape.⁽⁶⁾

アイオナにとって、自分の生きている感覚を表現する方法は二つある。一つは性行為……もう一つは言葉だ……彼女は外国語の言葉を求めていた：なじみのない発音、未知の音節、謎めいた記号……外国語は彼女に逃げ場を提供するのだ。

そのロンドン生活に変化をもたらしたのは Jian と Mu の往復書簡と日記である。Iona はその書簡と日記を読んで二人の物語に魅了され、二人の人生に自分の生活を投影して自分のことを考え始める。Iona にとって、Mu と Jian は China という謎の他者を象徴している。この China は現実の中国ではなく、イギリスの外 (異域) を意味する記号である。二人の書簡と日記を翻訳することは、China という他者へ想像的に越境する行為と言える。こういう想像的な越境行為を通じて、Iona は人生の意味と未来の希望を手に入れる。Iona の中国との関わり方は、かつて中国に関心を寄せても直接に中国に接することができなかった欧米の人々の中国想像のある種の典型的なパターンを示していると言ってもよい。

Jian、Mu と Iona の三人の越境の裏には、二種のステレオタイプの想像が隠れている。Jian と Mu の越境の原動力は中国の内部から外部へのユートピア的な想像である。Iona の越境には中国の外部から中国へのエキゾチックな想像が潜んでいる。しかし、そのような想像はいずれも彼ら自身によって最終的に否定される。そして、ユートピア的な異域像とエキゾチックな中国像の解

(6) Xiaolu Guo: *I Am China*, Vintage 2014, p11。

体から、中国と異域を結びつける新たな想像力が生まれてくる。それが郭小櫓の想像力の越境性を解き明かす鍵となる。次節では、この二つのステレオタイプの想像の実態とその解体について論じたい。

2. 西はユートピアではない——ステレオタイプの想像の解体

2.1. Jian の場合——革命と自由の幻想

中国にいたとき、Jian は積極的に政治運動に参加し、中国を変えようと努めていた。政治イデオロギーに反抗する性格の形成には、父親への憎しみとコンプレックスのほか、もう一つの要因が存在する。それは異域を見る独特のまなざしである。この小説のプレリュードには、以下のようない節がある。

All the students in Beijing's universities started to worry about the future ... Is there any hope? We wondered. And that same week the socialist Polish government held its first democratic election. Everyone in the West was talking about democracy vs communism. But China was uninterested. Nothing would change.⁽⁷⁾

北京の大学のすべての学生たちが（中国の——引用者）未来を心配し始めた……希望はあるのか？私たちは考えた。その週、ポーランドの社会主義政府が初めての民主選挙を開催した。西側諸国の人々はみんな民主 vs コミュニズムを議論していた。だが、中国だけが興味を示さなかった。何も変わらないだろう。

このプレリュードはイギリスに追放された初日に Jian が Mu 宛てに書いた一通の手紙によって構成されている。引用の部分は1989年の北京の学生デモに関する Jian の回想である。ここで注意すべきなのは、Jian のような80年代の大学生が中国の未来を考えると、ポーランドとか欧米（the West）を念頭にしていることである。1989年は、ちょうど東欧革命が始まった年でもある。ポーランド、ハンガリー、ルーマニアなど、元々ソヴィエト連邦と同盟だった東ヨーロッパ諸国では、社会主義体制が崩壊し始め、民主化が進んでいた。それに対して、中国は1949年以来中国共産党による一党専制を保ち続けていた。Jian の回想からは、中国にもポーランドのような変革が必要ではないかといった意識がうかがわれる。彼の目は西洋に向けられていた。その政治観念には明らかにこのような異域へのまなざしが隠れている。それを考慮に入れば、彼がマニフェストの中で言う「革命」と「自由」の意味も分かってくる。「革命」とは社会主義の専制から民主制への変革を、そして、「自由」とは言論、デモなどの政治的自由を意味している。彼

(7) Xiaolu Guo: *I Am China*, Vintage 2014, p4.

の異域へのまなごしは、西側諸国が民主と政治的自由の模範だという想像に支えられている。これは80年代の中国で成長した若い知識人たちが共有していた西洋に対するステレオタイプの想像でもある。例えば、中国の民主・人権運動のシンボルとみなされ、天安門事件のとき学生デモを応援した劉暁波の民主と人権の観念の背後にも欧米への視線が隠れている。中国にいた時の Jian の政治的願望はこのような想像から誕生したものといえる。

しかし、ヨーロッパに追放された Jian は自分の想像した欧米と異なる現実を目にした。ヨーロッパの各地を転々として、不公平に待遇された。イギリスに着いた最初の数日間、彼はロンドンの狭くてぼろぼろのアパートに泊まっていたが、言語も通じず、金もなく、食べ物も口に合わなかった。持病の胃痛に耐えられなくて病院に通ったが、言葉が通じないせいで胃腸科の医師に頭がおかしいと思われて、リンカンシャーの精神病院に移されてしまう。彼は看護の人たちに自分の頭が正常だと弁解しても相手にされず、強制的に精神患者として収容された。彼は仕方なくバッキンガム宮殿にいるイギリスの女王へ手紙を送った。イギリスの女王ならきっと「この世界の公平わかっているはずだ」と思ったが、その手紙は女王の手に届かず、そのまま返送されてきた。彼はまたイギリスで難民申請をして、ビザを獲得しようと試みたが、理由もなく拒絶された。後に彼はドーバーの移民移転センター (Immigration Removal Center) に移され、最後はスイスのベルン市の難民収容センターに移された。そこで、難民資格が認定されて1年間の難民ビザを手にした Jian はフランスに入った。暫くの間、フランスの辺境の都市アヌシーの中国料理屋で仕事をしたが、最後は流浪アーティストとして生きようと決めてパリへ行った。パリでホテルの地下室を借りて住んでいた Jian は、仕事が見つからず、友達もない孤独の生活を送った。未来の希望を感じられない Jian は、最後にギリシャのクレタ島へ行き、海に身を投げて自殺した。

およそ2年間のヨーロッパ滞在は、Jian の人生の最も悲惨な経験だった。その間、彼は過去を思いながら、自分について色々考えた。彼は、ヨーロッパにいる自分を中間状態 (in-between state) にいる非人間 (non-person) だと思っていた。平等で自由な政治的権利を手に入れるどころか、彼は「どの国にも属さないし、どこの公民でもない」(you don't belong to any country; you are not a citizen of anywhere.⁽⁸⁾) 政治亡命者に過ぎなかった。そして、難民ビザを獲得してフランスのアヌシーに着いた頃、Jian は以下のように考える。

Now I am a FREE man. No address, no bank account, no money, no family, no friends, no more persecution, no more protection. Absolutely free. Nothing to lose, nothing to gain, as I am a free man!⁽⁹⁾

(8) Xiaolu Guo: *I Am China*, Vintage 2014, p55.

今私は自由の身だ。住所、銀行口座、金、家族、友達など一切持っていない。これから迫害も保護もないはずだ。完全に自由だ。失うべきものもないし、獲得すべきものもない。私は自由の身になったからだ！

「失うべきものもないし、獲得すべきものもない」、これがこの時の Jian の自由だった。明らかに中国にいた時に想像した「完璧な自由」とは違うのだ。彼はもう革命を考えていない。そして、ヨーロッパが彼の想像したような平等、公平と自由の理想郷ではないことにも気づいた。パリを離れたとき、Jian は高校時代から使ってきたギターを深夜クラブのセクシーパフォーマンスの女性グループに譲る。この行為は、パンクミュージシャンとして政治に介入してきた自分を徹底的に否定することを意味している。クレタ島で、Jian は「私の言うことを聞きなさい。これが私の告白だ。イデオロギーは屠殺場みたいなものだ。私は最初からこの屠殺場で生きてきた」(So hear me, this is my confession: ideology is a slaughterhouse. And I have been living in this slaughterhouse from the very beginning⁽¹⁰⁾) と日記に書いた。西側はユートピアではない。中国の専制と同様に、想像された欧米の「自由」も単なるイデオロギーに過ぎないと言っているのに等しかった。両方とも彼に絶望しかもたらさず、最終的に彼を死に追い込んだのだ。こうやって、ステレオタイプの欧米想像に裏付けられた「革命=芸術=完璧な自由」という願望は否定され、同時にその背後のステレオタイプの欧米想像も否定された。

2.2. Mu の場合——個人の自由を求めて

次に Mu について検討してみたい。

Mu は大学時代から詩人となる夢を見ていた。しかし、中国ではその夢を叶えることができなかった。恋人の Jian が海外に追放され、父も重病になったとき、Mu は、北京の一つの地下バンドのメンバーとともに「China Underground Slam Poetry Group」を結成し、ウクレレを弾いて詩歌を唱いながら、アメリカ全土を巡演する旅に出た。これは Mu の一回目のアメリカへの越境である。この越境の裏には、Mu の異域へのユートピア的な想像が隠れている。

Mu は大学時代から、アメリカの詩人シルヴィア・プラスとアレン・ギンズバーグが好きだった。彼女にとって、アメリカという異域は詩歌の理想郷であり、夢の地だった。それについて、Mu はアメリカへ行く前に Jian に宛てて書いた手紙の中で次のように述べている。

I will be in that place I always dreamed about going to: America! Yes, you won't believe

(9) 同上, p217。

(10) Xiaolu Guo: *I Am China*, Vintage 2014, p326。

it, and neither do I. But I am going to go to America! You remember how desperate I was to get out? Dreamed for years and now it comes true.⁽¹¹⁾

私はずっと夢見ていたあの場所、あのアメリカへ行くの！そうよ。あなたは信じないかもしれない。私だって信じられなかった。でも、私はアメリカへ行くの！私がどんなに中国の外へ出るのを望んでいたか、まだ覚えているでしょう。何十年も見てきた夢が間も無く実現するのよ。

「America」と「dream」がそれぞれ二回使われている。アメリカという場所への憧れ、そしてその憧れが現実になったときの興奮の気持ちが言葉に溢れている。

なぜ、アメリカにそれほど憧れていたのだろうか。小説の中で、作者は次のように示唆している。

Maybe I will become a real writer in America. She says to herself … I should do what I want to do, I am no longer a proofreader for a state magazine in China. This is America after all.⁽¹²⁾

私はアメリカで本当の作家になるかもしれない。彼女は自分に言った……私は自分のやりたいことをやるべきだ。私はもう中国の政府系雑誌の校正係ではない。何と言ってもここはアメリカなのだ。

アメリカに来たばかりの Mu はシカゴにいた。アメリカにまだ慣れていなかったが、この国では詩人になれるかもしれないと思っていた。アメリカは中国と違って厳しい文芸作品の検閲はないし、個人の成長を制限することもないのだ。誰でも努力しさえすれば夢が必ず叶えられる。典型的なアメリカンドリームである。アメリカは個人の自由を象徴する個人主義のユートピアとして想像されていた。自由のアメリカは Mu だけでなく、80・90年代の中国で成長した多くの文芸青年が共有していたステレオタイプの想像でもある。例えば、1990年代の人気ドラマ『ニューヨークにいる北京人』（『北京人在纽约』）の中で、主人公のチェロ演奏家の王起明はまさにアメリカンドリームに憧れてニューヨークへ行った。その越境にも Mu に似たようなアメリカ想像が潜んでいる。

しかし、アメリカの様々な現実を目にした Mu はその国に対する認識を段々と変えていく。まず、アメリカには中国に対する偏見が存在する。ニューヨークのホテルの受付で、Mu とそのグ

(11) 同上, p111。

(12) Xiaolu Guo: *I Am China*, Vintage 2014, p129。

ループはアメリカ人に変な質問をされる。「中国人はまだ Kommunismus を信じていると聞いたが、それは本当ですか？」(I heard you Chinese still believe in communism, s'at right?⁽¹³⁾) また、その中国人を見る目はまるで「テレビから出てきた人々を見ているようだった」。アメリカ人の中国に対する無知がそこに端的に現れている。

中国に対する偏見のほか、アメリカには女性への差別も存在する。Mu 本人は、マネジャーの Bruce にセクハラをされた経験がある。小説の第 5 章で、そのセクハラの経緯が仔細に描かれている。五月の熱い午後、カリフォルニア州のホテルのプールで、Mu はエアーマットレスに横たわって昼寝をしていた。その美しい姿に惹かれた Bruce はその側に近づき、彼女をプールの縁まで引っ張ってペニスをその身体に強引に挿入しようとした。Mu は必死に抵抗してついに振り切って逃れた。Bruce の行為は強姦に等しい犯罪とも言える。その事件の後、Mu はアメリカに対する失望感が深まり、男性性に反抗するフェミニズム意識も芽生えた。彼女は「第二の性か否か」(*The Second Sex, Or Not*) という詩を書いて女性差別を批判した。

最も Mu に失望感をもたらしたのはハーバード大学の詩歌クラブで自分の詩を読んだときに起こった事件である。彼女は二つの詩を朗読した。一つは「第二の性か否か」で、もう一つはアレン・ギンズバーグの詩 *America* をまねて作った中国批判の詩だった。朗読会がまだ終わらないうちに、彼女は愛国心がないとか、欧米にごまをする奴 (Western-ass-kissing people) など、舞台下の中国人留学生から罵声を浴びせられた。数人の男性は舞台にあがって髪を引っ張ったり、ビンタを食らわしたりして、彼女をいじめた。この事件後、彼女はアメリカにもイデオロギーが存在するのだと思い、アメリカで詩人になることを断念して帰国することを決意した。

このような一連の出来事がある、Mu のアメリカに対する認識は著しく変化した。その変化を端的に示している箇所が小説の中に二つある。

一つはアイダホ州にいたときに書いた日記の一節である。

Is America as we always imagined? Well, there is everything you would expect from America. All the clichés about this land of living clichés are true. But perhaps that's because people want them to be true. It's like ideology, you are told to believe some stuff and you are never supposed to give it up!⁽¹⁴⁾

アメリカは私たちいつも想像していたような国なのか？ アメリカへのありとあらゆる期待がそこにはある。今も陳腐な表現に満ち溢れたこの土地に関する常套句は、すべて正しい。しかし、それは人々がそれらを正しいと思いたいからなのかもしれない。これはイデオロ

(13) 同上, p125。

(14) Xiaolu Guo: *I Am China*, Vintage 2014, p145。

ギーみたいなものだ。何かを信じると吹き込まれたら、あなたは絶対にその信念をあきらめようとしないうらう！

もう一つは帰国する前にメイン州へ一人旅行したときに書いた日記の一節である。

Perhaps America is a place one has to discover for oneself and to live for oneself. Westerners believe in individuality – ‘Be yourself and live for yourself’ … And even if it is good and valid to ‘live for yourself’, the problem is, what if one hasn’t got oneself … I feel reduced to nothing here. Perhaps it is possible to live without yourself in China, but not in the West. Unless one invents oneself.⁽¹⁵⁾

アメリカは人々が自分のために発見し、自分のために生きていくべき場所なのかもしれない。欧米人は個人主義を信じる——「自分らしくなって自分のために生きる」……たとえ「自分のために生きる」というのが有効で正しいことだとしても、問題は自分がいない場合はどうなのかということだ……この国で、私は何者でもない人間に降格されたような気がする。中国では自分がいないまま生きていけるかもしれないが、欧米ではそれは不可能だ。自分を作り上げない限りは。

Mu はアメリカンドリームと個人主義について考える。確かにアメリカでは努力すれば欲しいものを手に入れられるかもしれないが、それは私たちが勝手に信じ込んでいるイデオロギーみたいなものではないか。欧米の人々は個人主義を信じている。しかし、そもそも自分を持たない人間がどうやって自分のために生きられるのか。自分とはそれぞれの個人が作り上げていくものではないか。Mu は昔信じていたアメリカンドリームを否定するだけでなく、自分を持っていないから個人主義に相応しくないとと思う。そうやってアメリカンドリームと個人主義を否定することによって、アメリカに来る前に抱えていた「アメリカ＝自由のユートピア」というステレオタイプの想像も解体するのである。

中国にいたとき、Jian と Mu は二人とも中国の外＝欧米を自由のユートピアとして想像していた。しかし、実際に越境して異域の現実にぶつかったあと、欧米はユートピアではないということに気づき、自らの想像を否定する。こうやって、二人の越境の裏に潜んでいるステレオタイプの欧米想像は解体してしまうのだ。だが、二人にとってその想像の否定は異なる未来を意味している。Jian の自殺は、政治的想像が否定された後、現実の可能性も閉ざされたことを暗示してい

(15) Xiaolu Guo: *I Am China*, Vintage 2014, p202.

る。しかし、後で検討するように、アメリカへの想像の解体は現実と向き合う新たな可能性を Mu にもたらずのだ。

2.3. Iona の場合——本当の中国とは何か

前述したように、Iona は島の外の世界を想像することを通してシンボリック的に越境している。その越境行為には、中国に対するエキゾチックな想像が潜んでいる。

Iona は Applegate Books という出版社から Jian と Mu の書簡と日記の翻訳の依頼を受ける。しかし、そもそもなぜ出版社はこれらを出したいのか。小説の第 1 章第 2 節で、Iona は出版社のパーティに参加したとき編集者から以下のような話を聞いた。

We used to publish eminent people's biographies, like the Dalai Lama's, but no one cares about eminent figures any more. We're more interested in marginal characters, especially if they're connected to something big.⁽¹⁶⁾

私たちはダライ・ラマみたいな偉人の伝記を出版していたが、今や誰も偉人のことなんて気にしない。それより、いまの私たちは周縁にいる人物に興味を持っている。特に大きな人物と関係の深い周縁の人物たちに。

出版社が最も興味を持っているのはダライ・ラマのような偉人の伝記あるいは「大きな人物」と関係ある周縁の人物の物語だ。ダライ・ラマといい、「大きな人物」といい、明らかに中国の政治に関わる話である。特に、ダライ・ラマは中国の非民主制と宗教の不自由を批判するのに好都合な例と言える。後に、Jian が中国の国家主席の息子でしかも政治運動に関わっていたとわかったとき、出版社の責任者 Jonathan は二人の書簡と日記を中国批判の対話集として編集し出版する企画を立てた。このような出版界の姿勢に潜んでいるのは、中国が西側諸国と違って不自由な非民主的体制の国家だというステレオタイプの中国想像である。その中国はいつも批判の対象である。しかも、批判に資する素材だけが出版社などのメディアに重要視されるのだ。

Iona 本人は中国をどのように想像していたのだろうか。Iona が中国に興味を持ち始めたのは小学生の頃だった。ジュール・ヴェルヌの小説を読んだ彼女は、地底のトンネルを潜っていけば地球の向こう側に紫禁城があり、そこの中国人は龍をペットとして飼うのだと信じ、中国をエキゾチックな異域として想像した。後に、大学の旅行で 2 ヶ月ほど中国に滞在したが、そのとき「中国は魅力的だが理解できない」⁽¹⁷⁾ 国だと思った。彼女には、現実の中国が理解できなかった。そ

(16) Xiaolu Guo: *I Am China*, Vintage 2014, p13.

(17) 同上, p39.

して、ロンドンで翻訳者となった Iona にとって、中国語は現実から逃避する場所を提供してくれる外国語に過ぎなかった。子供の時から中国語の翻訳者となった現在まで、中国は現実として理解されたのではなく、ただ今生きているイギリスの現実と異なる魅力的かつエキゾチックな異域として想像されていたのだ。

しかし、書簡・日記を翻訳しているうちに、Iona の中国に対する姿勢は段々と変わって現実の中国を知りたくなってくる。例えば、二人の大学時代の恋愛物語と Jian のパンクバンドの演奏会のシーンを読んだとき、Iona はそのような情熱と愛情にあふれた青春に惹かれて、中国の若者たちの生活に興味を持つようになる。また、Jian の手紙と日記によく出てくる「牛逼」(すげえ)「他大爷的」(クソ野郎)のような中国北方の俗語を翻訳したとき、その言葉に生き生きとした人間味を感じてもっと中国の文化を理解したいと思うようになった。その姿勢の変化に関して、小説では次のように描かれている。

One day, she thinks, she will master the language and understand the culture perfectly. Iona imagines herself eventually settling down in China – and perhaps one morning, say, on the Fifth Ring Road of Beijing’s Haidian District…

いつか必ずこの言語をマスターしてこの文化を完璧に理解すると彼女は思った。アイオナは自分が最後に中国に定住している様子を想像した——例えば、ある朝、北京海淀区の五環路で……

このとき、中国はエキゾチックな他者ではなく、生き生きとした現実として想像されている。そこから本当の中国を理解したいという強い願望がうかがわれる。

小説の末尾で、Jonathan の出版計画を聞いた Iona は次のように言う。

Opening up-to China. Mu and Jian have such an incredible and tough story. It cuts across so much of what we take for granted.⁽¹⁸⁾

中国に心を開くのよ。Mu と Jian の物語は信じられないような、不幸なものだわ。私たちが当たり前と思っていた中国と違うわ。

中国に心を開くべきだ。当たり前だと私たちが思い込んでいた中国は本当の中国ではない、というのだ。「what we take for granted」という表現は、批判の対象としての中国とエキゾチックな異域としての中国の二つのステレオタイプの中国想像を含んでいる。Jian と Mu の書簡・日記

(18) Xiaolu Guo: *I Am China*, Vintage 2014, p350。

に出会い、二人の物語を通して想像的に中国へ越境した結果、元々のステレオタイプの中国想像は Iona によって否定され解体された。

以上、ユートピアとしての欧米とエキゾチックな中国という二つのステレオタイプの想像が小説の登場人物の「越境」によって否定される姿を見た。しかし、ステレオタイプの想像が解体されたあと、「越境」は何をもたらすのだろうか。Jian は自殺しその先を見ることができなかったが、Mu と Iona の姿には、現実を見つめる新たな視線の獲得、生きることの新たな可能性の発見が暗示されている。次節では、その実相を見てみよう。

3. 現実を見つめる新たな視線——可能性がここにある

3.1. Mu——自由への新しい道

アメリカから帰ったあと、Mu は故郷に帰って両親と一緒に暮らすことを決める。彼女は十数年間 Jian と一緒に住んでいた北京のアパートを手放し、Jian からの手紙以外のものは全部捨てることにした。実家に戻った彼女は、父の看護をしたり、家事の手伝いをしたり、庭の空地で野菜や花々を植えたりして、平穏な生活を送る。母親に未来の計画を聞かれると、いつも沈黙を保ち続けた。未来について考えないようにしていた。まもなく、父が癌で死亡した。彼女は、その家に漂う死の匂いに耐えられず、実家で暮らす意味がわからなくなる。ちょうどそのとき、「Slam Poetry Group」の元のメンバーたちから手紙が届いた。ボーカルの Lutao はカリフォルニア州で音楽を放棄して普通の仕事を見つけた。ドラムの Dongdong もゲーム会社で働いていた。Dongdong は手紙の中で「時代の新しい精神を手にするときがきた」(Time to grasp the new spirit of the age⁽¹⁹⁾) と落ち込んでいた Mu を励ましていた。「時代の新しい精神」とはどういう意味か、Mu にはわからなかった。しかし、その言葉は彼女の頭に宿り、過去・現在・未来を考えるように彼女を促した。その結果、彼女は新しい生活を始めようと思いつく。そして、父の旧友の助けを得て、中国系の造船会社のイギリス支社で働くチャンスを手にしてロンドンへ移住する。イギリスの空港に着いたとき、彼女は次のように思った。

It's an absolute goodbye to the once-innocent Misty Poet, a goodbye to the no-longer-confused, angry Sabotage Sister⁽²⁰⁾ ... she has a feeling that here, somehow, she will encounter 'the new spirit of the age', whatever that turns out to be.⁽²¹⁾

これは昔の無垢な朦朧詩人への完全なる告別だ。迷いを感じない怒りがちなサボタージュ

(19) Xiaolu Guo: *I Am China*, Vintage 2014, p299.

(20) Sabotage Sister は Mu がアメリカ巡演の時に使った芸名である。

(21) Xiaolu Guo: *I Am China*, Vintage 2014, p302.

シスターへの告別だ……ここでは、「時代の新しい精神」——その精神がどんなものであろうか——に出会うかもれないという気がした。

Mu は、Jian と一緒に暮らし、アメリカで詩人になろうと努力した自分、即ち過去の自分と決別し、現実と向き合い、自分にとっての「時代の新しい精神」を探そうと決心したのだ。

イギリスで Mu は最終的にその「精神」を見つけた。それはどのようなものだろうか。Iona 宛ての手紙の中で Mu は次のように書いている。

If we always have to engage in ideological struggle like Jian, to try to gain political power, where is the place for life? … We die, governments change, ideologies evolve, borders disappear, rivers merge, islands sink, trees rot, bones dissolve, even nature expires one day … we only have one life to live.⁽²²⁾

もし私たちがみんな Jian のように、いつもイデオロギーの闘争に巻き込まれて政治権力を獲得しようとしているなら、生活の空間はどこにあるのでしょうか……私たちが死に、政権が変わる。イデオロギーが変化し、国境が消える。川と川が合流し、島々が沈む。木々が朽ち、骨々が溶ける。自然すら絶滅するかも知れません……私たちには一度の人生しかないのです。

Mu が見つけたのは現実を見つめる新たな視線である。この世の物事、すべては変化の中にある。政権、イデオロギー、国境、川、山、島など、変わらないものなど存在しない。変化こそ世界の真実である。その真実に比べて、イデオロギーとか政治とかは取るに足らないものではないか。その変化に従って生きていくこと、それが Mu の発見した新しい生の可能性である。Mu はユートピアとしての異域を想像することを諦めて、今生きているイギリスという現実へ視線を向け、その現実と向き合いながら詩人として生きることにした。祖国も異域も関係なく、自分に相応しい場所で生きていくこと、それこそ真の自由だと彼女は考える。こうやって、Mu は最終的に新しい自由への道を発見したのだ。

3. 2. Iona —— 生きている感覚

現実と向き合う新たな視線を発見したのは Mu だけではない。

Jian と Mu の書簡・日記と出会う前、Iona はいつも自分の生きている現実世界から逃げようとしていた。まず、マル島の家族から逃げた。Iona の父親はアルコール中毒の老人でいつも家

(22) Xiaolu Guo: *I Am China*, Vintage 2014, p358.

近くのパブで夜遅くまで酒を飲んでいて、また何十年もの間、同じ町の女性と愛人関係になって妻の留守中にベッドルームでその愛人とセックスしていた。中学の時その事実を発見して以来、Ionaは父と疎遠になり、ろくに口をきかないようになった。夫の秘密を知っているのに沈黙を保ち続けた母親に対しても不満を感じた。両親との関係が悪くなってIonaはその家から逃げマル島を離れた。ロンドンに行ったあと、Ionaはめったに実家に帰らず両親との連絡もほとんどなかった。時に母親から電話をかけられても挨拶だけで電話を切るようにしていた。

次に、ロンドンでは人間関係から逃げた。特に親密な男女関係を嫌った。彼氏のいないIonaは、性の欲求を感じたとき、いつもパブやネットで知り合った男と1回限りのセックスをしていた。男に関して、「彼女はいつも1回か2回しか会わなかった男に、完璧ではない正しくもない何かを見つけるのだ。その男のことを知れば知るほど、ますます彼と関わりたくなくなる」(She always finds something not right, imperfect, attached to man after she has seen him once or twice. And the more she knows that person, the less wants to entangle herself with him.⁽²³⁾)と考えていた。現実世界から生きることの楽しさを感じ取れないIonaは、外国語の世界、つまり異域の想像に逃げ込み、そこから生きている感覚を汲み取ろうとした。

しかし、JianとMuの物語に魅了されたIonaは、段々と世界に対する認識を変えて、現実を見つめる新しい視線を獲得する。まず、彼女は中国を単なる他者として想像するのではなく、それを一つの現実と認めて本当の中国を理解しようと思う。この本当の中国はIonaが発見したはじめての現実である。それだけではなく、家族と男女関係に対する彼女の態度も変わる。

小説の第7章の最後で、Ionaは母親の60歳の誕生日を祝うために実家に戻る。彼女が目にしたのは関節炎に苦しめられている老人だった。関節の痛みでよろめいた歩き方をしている母はいつもつまずきそうだった。酒瓶を握るその手も震えていて、医者から睡眠薬が処方されていた。そのように衰えた母の姿を見たIonaは「この古い農場とこの年取った家族に対する罪悪感」(guilt with this old farm and this old family⁽²⁴⁾)を覚える。その罪悪感を償うかのように、彼女は両親を連れてクレタ島に休暇旅行をしようと母親に提案する。彼女は両親に優しくして家族関係を改善しようと心に決めたのだ。

男女関係に関しても、Ionaは愛を見つけた。彼女はJianとMuの恋愛物語に感動してこの世には愛情というものが本当に存在しているのだと感心する。彼女は段々と見知らぬ男とのセックスが嫌になる。そして、仕事の関係でJonathanと交際しているうち、彼に惹かれて恋に落ちた。それはIonaが経験したことのない感情だった。Ionaは最初それを否定しようとするが、小説の最後でJonathanの家で食事したとき自分の気持ちに素直になって愛を受け入れる。その時の

(23) Xiaolu Guo: *I Am China*, Vintage 2014, p60.

(24) 同上, p308.

Ionaの気持ちは次のように描かれている。

She knows there is precious in this moment, something to do with love, in this place, right now. She feels like crying. This feeling is so fragile, so discreet, and yet it seems mutually acknowledged without either of them saying another word.⁽²⁵⁾

彼女は何か貴重なものがこの瞬間にあることに気づいた。愛と関わる何かが今この場所にある。彼女は泣きたかった。それは脆くて控えめな感覚だったが、無言のうち二人ともに認めていた。

エキゾチックな中国想像が否定された後、Ionaはその視線を想像の中の他者から現実へ向けた。彼女は心を中国に開き、本当の中国を理解しようと決心した。そして、家族と愛を発見し、イギリスという現実と向き合う新たな可能性を見つけた。Iona本人の言葉を借りて言うと、その可能性とは、いまここにある現実の中で生きる感覚である⁽²⁶⁾。そこには異域とここの区別はない。世界は開かれている。中国出身の郭小櫓はIonaに代表された欧米人の中国想像の変容に気づき、その変容を小説に書いた。小説の末尾のIonaとMuの面会が暗示しているように、郭小櫓はある意味で中国と欧米の新たな結びつき方を暗示しているように思われる。

4. 結語——中国と異域を結びつける想像力

小説*I Am China*には、Jian、MuとIonaの三人に代表される政治的願望、自由への憧れや他者への想像といった三つの越境の様相が描かれている。JianとMuの越境には、欧米諸国＝政治・個人自由のユートピアといったステレオタイプの想像が隠れている。Ionaの越境もエキゾチックな中国というステレオタイプの想像に裏付けられている。しかし、この二種のステレオタイプの異域想像はやがて越境によって否定される。このような想像を否定した後、現実を見つめる新たな視線を通して、現実と向き合いながら生きていく可能性が見出される。そこに郭小櫓が越境作家として見せる想像力の特徴が表れている。

80年代に中国と世界がつながって以来、出国した中国人や中国と関わる欧米人につきまわっていたステレオタイプの想像力とは異なる精神が生まれつつあるように思われる。郭小櫓はその一面を鋭く捉えている。ユートピアとしての欧米とエキゾチックな中国、これは80、90年代の中国大陸の多くの文芸作品、郭小櫓以前の華人作家の小説、そしてかつての欧米の文芸作品によく見られるステレオタイプの想像でもある。前世代の作家の想像力の枠組みを乗り越えてこれらの想

(25) Xiaolu Guo: *I Am China*, Vintage 2014, p351.

(26) Ionaは次のように言っている。“I feel like I’m looking for something — a certain aliveness.” (何かを探しているような気がする。それは生きている感覚かも。) 同上, p307.

像をいかに超克するか。それが、越境が非日常的なものではなくなった今日の問題でもある。*I Am China* から、越境作家としてこの問題に立ち向かい、新しい想像力を生み出そうと試みた郭小櫓の創作姿勢がうかがえる。そして、新しい現実と向き合いながら生き方を模索する Mu と Iona には、中国と欧米の現在に立ち臨み、互いの現実を見直し、両方が関わる新しい可能性が見え隠れしているように思う。

郭小櫓だけではなく、イーユン・リー、ケン・リュウなどの越境作家の作品からも似たような創作姿勢が見られる。それは、イーユン・リーの場合、前世代の中国系アメリカ人作家への反発と現在の中国を描く新たな視線、ケン・リュウの場合、中国に代表される東洋文化とアメリカに代表される西洋文化を融合・調和する姿勢によって特徴づけられている。まさに華人作家の文学創作の新たな地平が切り開かれつつあると言ってよいだろう。そこには中国系外国人作家の創作に潜んでいた中国—欧米の二元対立の構造を脱構築し、中国と異域を結びつける新たな可能性、「越境する想像力」とも言うべきものが暗示されている。

参考文献

- Guo, Xiaolu: *I Am China*, Vintage 2014.
Guo, Xiaolu: *20 Fragments of A Ravenous Youth*, Vintage 2009.
Guo, Xiaolu: *Lovers in the Age of Indifference*, Chatto&Windus 2010.
Guo, Xiaolu: *Once Upon A Time in the East: A Story of Growing Up*, Vintage 2017.
Doloughan, Fiona: *Translation as a Motor of Critique and Invention in Contemporary Literature: The Case of Xiaolu Guo*, Gilmour, Rachael and Steinitz, Tamar eds. *Multilingual Currents in Literature, Translation and Culture*, pp.150-167, 2017.